

## 研究区分:若手研究

## 教育の質向上のための他者評価尺度を用いた技術演習評価

扇田 千代

看護学講座 臨床看護学ユニット

## 【研究目的】

医療系大学において、技術演習（以降演習とする）は各学部とも学生にとって重要な役割を担う必須科目でありその取得状況によっては臨地実習に影響を及ぼす。特に実習施設においてその演習成果は学生の評価対象となり、又その評価は大学の評価とリンクする。医学部教育に於いては、2005 年より臨地実習開始前に OSCE（客観的臨床能力試験）を導入している。又、2020 年には臨地実習後にも OSCE が実施され、看護教育にも導入されている。しかし、本学において各演習の評価は実施しておらず、それに特化した評価ツールも無い。講義の評価内容と同じ大学共通のアンケートを使用し、全講義終了後に講義と演習を含めた評価が実施されている現状である。演習評価に関する先行研究では、シミュレーション演習など特定の演習項目に対する評価研究で、評価方法はアンケートを使用しているが、その内容は各施設や学科オリジナルで作成されたものであり他との比較が出来ない事や自己評価尺度が採用されているものが多く、学生自身を主体とする評価方法である為教員の実施した演習の評価については分からなかった。看護の初学者である学生にとって、講義→デモンストレーション→実施と教員が主となり指導する機会が多い。学生による他者評価を行う事で、教育内容や教育方法に応じた評価が可能となる。教員の指導力が可視化される事で今後の指導方法の改善につながり、学生の演習に対する理解度が把握できることで教育の質向上につながると考える。そこで今回、信頼性・妥当性が検証され、演習に特化した他者測定尺度を用いた測定用具ファイルを用いて全 6 カテゴリーから演習後の評価を行う事で、各領域や各学部で同じ視点からの演習評価が可能となり、教員個々の指導力向上につながると考え研究に至った。

今回はその初期段階として、授業の半分が演習である基礎看護学領域で検証し、結果を評価・共有する。

## 【データ収集方法】

各学年の演習終了直後、5 段階評価アンケート用紙を配布し記入後回収

## 【データ分析方法】

6 項目の下位尺度ごとに集計し、合計点と項目平均点を算出する。総合点及び下位尺度の項目平均値と標準偏差を用いて高得点、中得点、低得点の 3 領域に分類し総合及び各下位尺度の分析を行う。更に、各下位尺度の各項目において平均値を算出し、弱み、強みを数値化し改善点の抽出を行う。

## 【結果・考察】

表 1 基礎看護援助論 I

I 時間配分と内容の難易度	4.7
II 意義・目的の伝達と指導ア	4.6
III 教材の活用・工夫	4.7
IV デモンストレーション	4.7
V 学生間交流	4.8
VI 学生・演習への態度・対応	4.8

表 2 基礎看護援助論 II

I 時間配分と内容の難易度	4.7
II 意義・目的の伝達と指導ア	4.7
III 教材の活用・工夫	4.7
IV デモンストレーション	4.8
V 学生間交流	4.8
VI 学生・演習への態度・対応	4.8

表 3 基礎看護援助論Ⅲ

I 時間配分と内容の難易度	4.7
II 意義・目的の伝達と指導	4.7
III 教材の活用・工夫	4.7
IV デモンストレーション	4.7
V 学生間交流	4.7
VI 学生・演習への態度・対応	4.7

6 項目における学生視点での演習評価は表のとおりであった。全体に評価が高かったのは、昨年度 4～5G/教員 1 名から今年度より演習応援教員を依頼し、3G/教員 1 名と指導を充実したためと考える。特に応援教員数が多かった演習では学生の評価も高い傾向にあった。これは、学生が質問や指導を受けやすい環境が出来たためと考える。

項目別にみると援助論Ⅱの洗髪など、器材数が少なく 1 人あたりに時間を要する演習は評価が低かった。演習器材の充実は学習効果に影響を及ぼす事が示唆された。

学年別では、1 年生は初体験の演習に際し、時間配分と内容の難易度の評価が全項目で評価が低かった。これは今後経験を積むことで改善されると考案。2 年生については、より臨床現場に近い演習項目での評価が高かった。これは基礎看護学実習Ⅰを経験し、臨床で何が重要なのかを経験した為、基礎看護学実習Ⅱに向けての学習意欲の向上が示唆された。

学生間交流の項目については各学年共に評価は高かった。これは自己評価項目によるバイアスの為と考える。

### 【今後の課題】

今回の研究で、学生の演習に対する課題を明らかにする事が出来た。評価の低い各項目や、各学年の評価の違いで見えて来た項目に対し、同じ演習内容であっても毎年入れ変わる学生の特色を踏まえて、臨機応変に内容や方法を変化させる事で、学生の学習意欲向上につながると考える。

### 【参考文献】

1. 片田裕子, 八塚美樹: 看護領域におけるシミュレーション教育の必要性. 富山大学看護学会誌, 6(2), 65-72, 2007
2. 志賀隆監修: シミュレーション教育, メディカル・サイエンスインターナショナル, 東京, 36-48, 2014
3. 玉井和子: 看護教育におけるシミュレーション教育の研究-ファシリテーターの役割とその活用について-, 佛教大学大学院紀要教育学研究科編, 第 43 号, 19-34, 2015